**「ハッピーエンドを迎えるには」 2017/11/26**

**マタイ 25:31-46 スティンストラ牧師**

最近私を楽しませてくれるテレビコマーシャルがある。王様は中庭で宴会を開いている。王様の席にゲストがそれぞれ王様の喜びそうなギフトを持ってやってくる。最初のゲストはバットワイザーのライトビール6本入りケースを持って王様にささげると、王様は頂戴した物を私の親友であると語り「delight: すばらしい」と賞賛する。すると客たちも「Dilly, dilly:すばらしいすばらしい」と呼応する。次のゲストは１ケース(12本入り)を贈答すると、王のさらなる喜びを獲得し、ゲストたちもさらに大きな声で、「Dilly, dilly」と呼応する。　三番目のゲストは誇らしげに、一瓶の自家製はちみつ酒をプレゼントする。しかしゲストの期待に反して王様は喜びを表わさず、城の地下にあるみじめな部屋へと案内されてしまう。

キリスト教会の今年の暦が終了するにあたって与えられているマタイ福音書に示された光景は、このコマーシャルから決してかけ離れているとは思えない。最後の審判に示された光景は、栄光の中で人の子が支配しており、キリストが支配する時代の始まりにあたって、大きな分離が起こっている。約束された御方は最初にすべての人々を彼の前に集める。人々はどれほど偽善に満ちていたか、頑なだったか、そして神の使命からはとてつもなく離れた力にとらわれていたか、を見られる。そのような人々は、異邦人とされ、いわば他人であり、非選民とされる。そして神の民はついに、彼らの敵であった人々に正義なる判決がくだるのを見る。。。

この光景はバッドワイザーのコマーシャルに比べ、ずっと陰気に思えるかもしれないが、共通点としてはこの聖書に表された光景においても登場している人々に大きな驚きを与えている。人々が王座の前を通って、彼等の運命的な永遠の行き先について知る時、彼等は自分たちが祝福された羊となるのか、あるいはいまいましい山羊となるのか、彼等が王にどうふるまったかを基準に分けられる。　彼等の中で何人かは王が必要としたことに応じて仕えたとしてすぐに用意された国を受け継ぐ報いを受ける。その王の必要としたこととは、飢えていたときに食べ物を与えたこと、のどの渇いているときに水を与えたこと、裸のときに着物を着せたこと、あるいは病のときには世話をして拘留されたときには訪問したことだった。他の多くの人々は王の必要したことに応じることをしなかったために永遠の火の中へと即刻、運ばれてしまう。

際立っているのはどちらのグループも、王の判断を聞いたときの反応の仕方だ。不思議にも結果を知らされたときに、彼等は王にいつ会ったのかは覚えていないと言い、「それはいったいいつだったのしょうか？」と質問している。　その質問は次のようなことを明らかにしている－彼等が注意を払っておらず、そしてイエスの命、死、そして復活をわかっていなかった以上に、イエスの支配ということも信じていなかった。王は、そんなことがあったことを覚えていない、などということはないと力強く宣言して、彼等が王にとって良きサマリア人であったのか、あるいは王を無視したのかを明確に聞かされる。そして王が実はどういう時に彼等が王に慈しみの心を現したかを説明したとき、彼等の困惑は軽減されていく。それは王の家族の中でもっとも小さきものにどう対応したかということだったのだ。二つのグループの大きな違いは、王に信仰をおいていたかどうかの問題ではない。単純に、食べさせたか、衣服を着せたか、迫害にあるときに信じるものを尋ねたか、あるいは王の家族が苦悩にあるときに目をそらしてしまったかにある。

今日見ている光景の中では、人の子がその権力をすべての民に行使するのは、彼等が人の子の力を信仰しているかどうかに関係はない。　神の民の共同体にどんなことがやってくるのか予告されており、彼等の主が実権を握っていることが確かであることに加え、部外者とされてきてしまった人たちのこともわかってくる。神が人々の経験している苦痛を覚えるとき、神は親身になり、憐れんで、愛を表される、しかしそのような苦痛を覚えていた者は、ただ悪魔だと考えられていた人々かもしれない。教会の外にいた人々は自動的に「よそ者扱い」されてしまわない。彼等は光を照らされ、神の無条件の愛が、私たちとは異なる人々・実は私たちの敵としてきたかもしれない人々にも注がれる。

今日の聖書箇所は、私たちに反対する者たちは皆みじめな部屋に行き、苦難に出会うことを確かなものとしているとして、うきうきして「すばらしい、すばらしい」と合唱するような話をしているのでは全くない。与えられている話は誰かほかの人々に非難を向けるのではなく、それ以前に私たち自身が神の支配とその活動をこの世の中に見い出して体験するように仕向けている。私たちは「それはいつだったのでしょうか」と質問など出てこようもないほどに多くの神の支配と活動の証拠があるにもかかららず、とかくわたしたちがここちよい環境に自分の身をおいてしまって一歩外に踏み出していないためそのような質問が口から出てしまう。この質問は、私たちが神に約束してすべての国々に出かけて行き、イエスの弟子づくりをしたかどうかを質問されているのではなく、単に私たちと文化の違う人々とか、異なる宗教の伝統を持つ人々とか、あるいは私たちの同じ教会に籍をおくものの他教会の礼拝形式を気に入って疎遠になっている人々に対して、神の愛を表しているかどうかだ。もし「それはいつだったのですか？」とイエスに質問しなければならないとするなら、まずそのことには関心を示したものの、神が存在し支配する御国に向かう行動が伴っていない。

それゆえ今朝の羊と山羊に分けられる世の終わりの話を、皆さんの人生の中で傷つけられた人々に対して、彼等は山羊になるに決まっていると心を硬くなにするような話としては断じて聞かないようにしてほしい。この世の中にはそのような気持ちになってしまうことが頻繁におこっているが、どうか古い時代が終わり新しい時代が来るということに柔軟な準備をする機会となりますように。そうすれば真にハッピーエエンドとなるお話ができることになるだろう。アーメン